

都留を、観察し、記録する

# FIELD NOTE

no. 106 Dec.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌  
『フィールド・ノート』 no. 106 Dec. 2020

特集

## 変化を楽しむ

変わることはこわいし、難しい。  
変化を選んだ人たちは、どんな気持ちだったのだろう。

# FIELD·NOTE

no.106 Dec.

contents

## 特集 変化を楽しむ

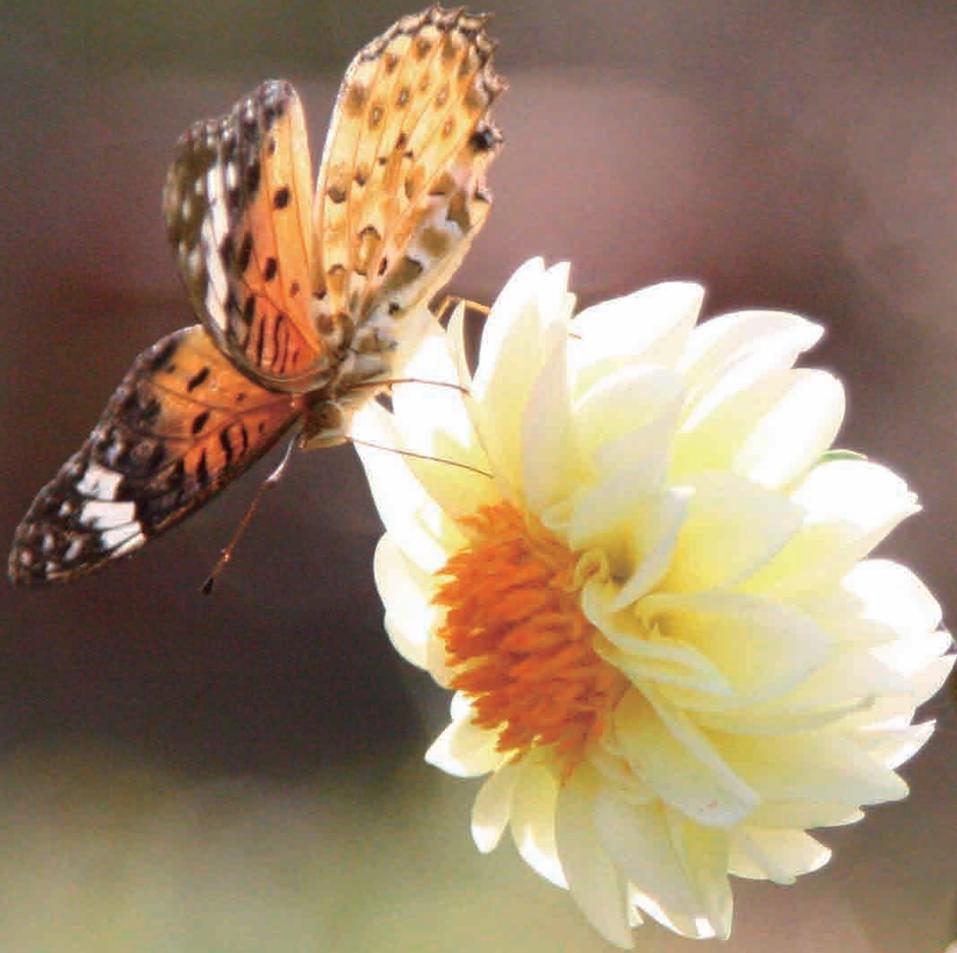
- 08 ならやのお菓子里に込められたもの
- 10 羽野さんの道しるべ
- 12 変わらないもの
- 14 ジェンギズ窯を訪ねて
- 16 都留という居場所
- 20 猫や歌丸
- 24 コラム 都留の今を写す
- 28 コラム 電話で知るあの人の今
- 30 みつける都留の水
- 37 フィールド暦
- 38 ムラサキツメクサ観察日記
- 43 ムササビ観察日記
- 44 都留の風景写真集—仲秋の候—

### 表紙写真



幹と枝を切られ枯れていた街路樹のヤマボウシに、色づいた一枚の葉が揺れていました。最期の時まで美しくあるすがたに心を打たれました。(2020年10月26日)

十日市場で見つけたツマグロヒョウモンがダリアにとまっている (2020年9月21日)



# FIELD MAP

山に囲まれた都留市ではいくつか市内を見渡すことのできるスポットがあります。見慣れた風景でも場所や時間を変えてみることでいつもとは違って見えます。早朝の九鬼山から見おろせる富士山は壮大です。パノラマ展望台からだと地形がよく見え、まちがずっと続いているような気がします。視点を変えると、新たな都留のすがたを発見することができました。

## 大月市



## 道志村

### 山梨県都留市

面積 161.63km<sup>2</sup>  
人口 29,888人 (令和2年10月現在)

足元の水路には富士山の湧水が流れ、身近な森ではムササビとの出会いを楽しめます。山梨県都留市では、自然と人の暮らしを近くに感じることができます。

1



九鬼山から 撮影日時：10月21日 午前6時30分

2



パノラマ展望台から 撮影日時：10月5日 午前9時30分

3



都留アルプストレイルコースから 撮影日時：10月20日 午後4時30分



# 変化を楽しむ

誰も想像しなかった暮らしが日常になりつつあります。  
世界は一変し、これからどうなっていくのかもわかりません。  
しかし、このような状況になったからこそ得られた気づきもありました。

誰かといっしょにいられる時間がとても幸せであること。

離れていても、画面などをとおした繋がりが  
大きな心の支えになること。

新しい生活でもなんとかやっていけること。

人間は、意外と強くてしぶといということ。

変わるという動きには不安もつきまといますが、  
身のまわりをみつめ返してみると  
少しだけ前向きに捉えられるのかもしれない。

周囲の変化を、おびえたり

落ち込んだりするだけで終わらせるのではなく

そこからさらに自分の力にするためには、どうしたらいいのか。

今まで私たちが記録してきたもののなかから

その手がかりを探してみたくくなりました。

今回は変わるという視点から、バックナンバーをめぐり返していきます。





# ならやのお菓子に 込められたもの



ならやは都留市中央、富士みち沿いにあるお菓子屋さん。店内には和洋さまざまなお菓子が並ぶ。そのなかには目新しいものや、なんだか懐かしさを感じるものがあつた。ならやのお菓子に興味を持った私は、お話をうかがうことにした。



ならやのお菓子は、店主である奈良英樹さん(48)が作り上げている。英樹さんは高校を卒業後、東京で7年間修行をし、25歳のとき都留へ戻った。26歳でお店を継ぎ、今年で24年目となる。

## 都留のお菓子

焼き立てのお菓子の香りが広がる店内。左右をお菓子の囲まれ、つい目移りしてしまう。そのなかでも私が気になったのは、名前に都留とつくお菓子だった。「つるつ娘餅」、「都留の響ひびき」、「つるビーマドレーヌ」。なかでも「つるビーマドレーヌ」は、「せつかく都留市には、つるビーというマスコットキャラクターがいるのだから、もつと商品を出していくべきだ」と、英樹さんが直接市役所に掛け合つて作ったものだ。すぐに実現とはいかなかったが、2、3年後、ついに形となった。こうして都留市で第4番目のつるビー商品に

なつたのだ。「ほんとは1番目になりたかつたんだけどね」と英樹さんはおっしゃる。名前に都留とつくお菓子は、地元の人がお土産として持つていけるように。そんな思いも込められているという。

## お菓子作りへのこだわり

英樹さんに、お菓子を作るときのコダわりをうかがつた。まず、保存料をいっさい使わないこと。保存料を使えば日持ちはするが、体には良くない。保存料を使わないぶん、日持ちを良くするような工夫をしているそう。ならやでは焼きドーナツを販売しているが、ここにも工夫がある。油で揚げると酸化してしまうため、日持ちしにくいのだという。ならやのお菓子はおいしいだけでなく、体にもやさしい。

そして、お菓子の素材には良いものを使うこと。北海道産の小豆など、さまざまな地域

から取り寄せたものが使われる。それにもかかわらず、お店に並ぶお菓子は手に取りやすい価格だ。たとえば、ならやでは130円でプリンが売られている。英樹さんによると、同じようなプリンが東京では230円で売られていたそう。そんなにも差があるのかと、私は価格設定の低さに驚いた。

ならやには近隣の人だけでなく、東京や神奈川など、県外からもお客さんが訪れるという。これらのこだわりが、お客さんが足を運んでまで食べたいと思う理由なのだろう。

## 変わるもの、変わらないもの

お話をうかがっているうちに、ならやが歴史あるお店だということを知つた。創業はなんと昭和元年。英樹さんで4代目になるという。初代店主のころの写真を見せていただいた。看板には「奈良」の文字が見える。昔は漢字表記だったのだ。昔の写真はこれだけし



①



②



③



④

①包装紙に大きくつるピーが印刷された「つるピーマドレーヌ」  
②見せていただいた写真。中央に立っているのが初代店主  
③丁寧に菓子の説明をしてくださる英樹さん  
④店内のようす。黄色い壁から温かみを感じる

が残っていないという。たった一枚の写真も、古くなって写真立てに貼りついてしまい、とすることはできない。

店名のように、写真のころと変わったことは多くある。昔は商店に卸すため、バイクを走らせてお菓子を配達していたそう。販売方法だけでなく、お菓子そのものも変わる。

お菓子にもやはり、流行というものがあるらしい。だから英樹さんはいつもアンテナを張っている。昔は月に1回は必ずほかのお菓子屋さんへ行き、お菓子や売りがたなど、多くのことを学んでいたという。忙しくなった今でも、年に数回は出かけるようにしている。「ネットで調べることもできるんだけど、やっぱり自分の目で。行ってみて感じとる」と英樹さんはおっしゃる。店内に並ぶたくさんのお菓子は、英樹さんの努力の結晶だ。

変化するものがあるいっぽうで、変わらないものもある。「酒まんじゅう」もその一つ。なかにつぶあんの入った、白いおまんじゅうだ。麴こうじが使われるため、名前に酒がつく。「酒まんじゅう」はお米があまりとれなかった時代に、主食として食べられていたものが起源だそう。そんな歴史あるお菓子を初代の店主

が販売しはじめて、今もなおずっと売られている。

どんどん変化する時代に柔軟に対応しながら新しいお菓子を作りだす。それと同時に、長い歴史を持ったお菓子を守り続ける。そんな姿勢が、ならやの魅力の一つなのだ。

ならやのお菓子には、都留への思いやこだわり、歴史など多くのものが詰まっている。これから生まれる新しいお菓子にも、こだわりや思いがたくさん込められるのだろう。英樹さんは、お菓子一つひとつについて、販売までの経緯などを丁寧に説明してくださいました。それは、それぞれのお菓子ができるまでにたくさんの方の苦労や努力があるからなのだと思います。

今回お話をうかがって、ただお菓子を食べているだけでは分からないことを知れた。このお菓子には、こんな思いが込められているんだな。そんなことを考えながら食べるお菓子は、なんだか特別にうれしく感じた。

杉浦茜（国文学科1年）＝文・写真  
加藤明香（初等教育学科4年）＝写真  
平岡摩梨菜（社会学科1年）＝写真

## 羽野さんの道しるべ

ふだん自然とのかかわりが少ない私は、自然と  
かかわって生きる人がどんな時間をすごしてい  
るか知りたいと思った。そこで自然にかかわる  
人にお話を聞くべく、宝地区で田畑を作ってい  
る羽野<sup>はの</sup>幸<sup>さち</sup>さん（30）にお会いした。

伊藤瑠依（社会学科1年） 文・写真



「明日寿命が来ても、後悔しないように生  
きていたいな、っていうのはあつて」。少し  
の沈黙のあと、考えた言葉をそのまま話すよ  
うにしてすらすらと羽野さんは言った。これ  
は、羽野さんに大切な時間をうかがったとき、  
時間という概念とは合わないかもしれないけ  
れど、と言いながら答えてくれた言葉だ。こ  
の言葉が私のなかでも印象的だった。

私が羽野さんと出会ったのは、昨年の秋。  
稲刈りのお手伝いのお誘いを受け、参加さ  
せてもらったのがきっかけだ。ほっそりと  
していて華奢な体つきだけれど、その見た  
目とは異なり、軽々と一輪車を動かす姿が  
魅力的な女性だった。現在羽野さんは、宝  
地区で野菜を中心としたさまざまな作物を  
作っている。けれど、農業を初めからして  
いたわけではなかった。

### 農業をはじめのまで

本学の卒業生である羽野さんは、大学4  
年生のときに大きな選択に迫られる。地元  
企業に就職するか、都留に残るかだ。さま  
ざまな人と出会い、自然豊かなこの土地で  
すごした大学時代は羽野さんにとって、と

でも思い入れのある時間だった。都留には思い出がぎつしり詰まっていたと羽野さんは言う。悩みに悩んだそうだが、経済的に自立したいという考えから内定が決まっていた会社へ就職した。

しかし、都留で生活がしたいという思いが消えることはなかった。だから企業に勤めて3年後に仕事を辞め、都留に戻ってきた。その後約2年間、農業の研修を経て、2012年に農家として独立し、今の生活をしている。

この選択にこそ、羽野さんの後悔しないように生きていたいという気持ちが表れていた。企業に就職するか都留に残るかという選択、企業をいつ辞めるかという選択。どちらも、後悔しないように生きていたいという思いが先を決める道しるべとなったのだろう。

お話を聞いて、自分は優柔不断なのでそういった選択のしかたはいいですね、と思ったことを伝えた。すると、私も優柔不断だよ、うじうじだよ、でもそういうときは人に相談しながら決めればいい、と笑いながら言ってくれた。後悔しないように生きようと考えられる羽野さんは、そんな考えすら持てない私

にとつては手の届かないところにいる人のように思っていた。けれど、ありのままの自分を言う姿を見ると、決してかけ離れた存在ではないのだと思えた。

### 羽野さんの今

こうして農業に携わるようになった羽野さん。今はどのような生活を送っているのか知るため1日のサイクルを尋ねてみた。すると羽野さんからいつの時期ですか、と逆に尋ねられてしまった。羽野さんの生活のリズムは季節によって時間が大きく変わっていたのだ。仕事をしている時間と太陽が出ている時間は同じだという。だから夏場には日が昇る午前3時に起きて収穫をはじめいつぼう、冬場は暗くなってしまう午後5時には早々と作業を終えてしまうこともあるそうだ。

時期によって生活がつねに変化しリズムが安定しない仕事。私なら心が折れてしまいそうな時間のすごしかただ。そこで羽野さんにとつて、仕事の好きなのところはなにか尋ねてみた。羽野さんは、自分の思いに合う言葉を探し出すようにして、一語一語を選びながら言ってくれた。

「1日中外にいられること。毎日同じ日がないのも好きだし、五感をフルに使える仕事、それもすごく魅力的でいいな。見た状態で判断するとか、触つてとか。それを感じられるつていうのはすごく生きている感じがして、私は好きですね」

これは建物のなかで働く仕事では決して感じられないことだ。以前企業に勤めた羽野さんだからこそ、外に出てじつさいに見て感じることのよさをひしひしと感じていたのだろう。

こんな時間をすごしている今、後悔することはないかがうと、ほとんどない、と晴れやかなようすで羽野さんは言った。

私は羽野さんのお話を聞いて、時間をすごすということは選択することだと思つた。自炊をするか、しないかという選択。大学に入るか、入らないかという選択。思い返せば今の自分の生活は、時間をどう使うかという選択をくり返してきていた。

選択するとき羽野さんは、後悔しないように生きていたいという、行動を決める道しるべをもっていた。今の私にそれはまだない。けれど羽野さんのように、ゆくえを示してくれる自分だけの道しるべを見つけたかと思つた。

# 変わらないもの



本誌95号(※)で取材させていた  
だいた「魚政」をふたたび訪れた。  
当時とは三町商店街にあったお店  
の場所や規模、販売のかたちが変  
わっている。たくさんの変化のな  
かに、変わらないものを見つけた。

## 常連さんに愛されて

ふわふわというよりはずっしり。  
甘い味つけだけれど、だしが効いて  
いくとくれないから、ぱくぱく食べ  
られる。私が「魚政」に厚焼き玉子  
を買いに行くようになったのは、お  
店が移転してからだった。

「魚政」は、山田政秋さん(72)  
と文美子さん(69)が二人で経営し



店の前で微笑む文美子さんと政秋さん(2019年2月21日)

ている。移転前は鮮魚店だったけれど、今は厚焼き玉子専門店として新しく上谷5丁目に店をかまえた。移転後オープンしたのは2018年の10月7日。以前は鮮魚といっしょにお惣菜と厚焼き玉子売っていた。「うちが店を閉めるってなったとき、常連さんが『玉子焼きだけでもやったら』っていつてくれて」。やわらかい笑顔で文美子さんが話す。当時から、厚焼き玉子はお客さんに愛される看板商品だった。

## 新しいスタート

以前のお店を閉めたきつかけは、先代からずっと頼っていた東京都の築地市場の間屋が、豊洲に移転することを機に何軒もやめてしまうことだった。「今までいいものをお客さんに出したいって思いでやってたから、満足してもらえないものが揃わないと続けられないですからねえ」と政秋さん。まだ働けるしどうしようか、と二人で悩んでいたところ、知

り合いの板金屋さんから、山田さん夫婦の自宅前のスペースに小さなお店を建ててあげようという提案があったのだそう。

「こうして再始動した新しい『魚政』では、昔からの常連客のほかに新しい層の客も買いに来るようになったという。本学に近い場所にあるため、授業のある時期は学生がよく来るのだそう。また新しく玉子焼き専門店として始めるにあたって、食べ歩きもできるような一口サイズも増やした。

「年末年始は厚焼き玉子の注文が殺到するため350本ほど焼いている」と前回の取材で答えていた二人。予約販売だけにしたにもかかわらず、昨年末は600本も焼いたそう。うだ。「大人気でした」と、文美子さんはにっこり。「おかげさまでね。でもこんな予定じゃなかったんですよ。お。年寄り仕事でね、二人でのんびりコツコツやろうつってたってんだけど、みんなが応援してくれるも

んだからだんだん忙しくなっちゃってね。政秋さんは、はっはと笑った。「幸せなことですね」、「ありがたいことですわ」と、笑い合う二人を見ている私も、おそらく二人と同じ顔になっていた。

**焼く人と見守る人**

厚焼き玉子を目の前で焼いて見せてくださっていた政秋さんは、「やつぱり、お客さんが『おいしかったよ』、『また来たよ』っていつてくれるのがいちばんうれしいね。それで『〇〇にもらっておいしかったよ』とかいわれるとね、ああ、よかったよって」と話す。そのとき政秋さんが卵の液をフライパンに流し込んで、ジュッと勢いのある音があった。「このジュッという音がしないとダメ。うふふ」と文美子さんはいう。「そう、さっきは音しなかったから家内が気づいて」。あつはつは、監視役なの。焼く人と、見守る人。



二人が厚焼き玉子を焼くときと、言葉を交わすとき。そのようすはよく似ている。互いの及ばない部分を補いながら厚焼き玉子を焼き、会話をするので。二人の掛け合いを見ていて、自然と顔がほころんだ。これまでと今とこの先、きっとそれは変わらない光景だろう。たとえ私が何年か経ってここを訪れたとしても、二人が変わらないあたたかさで出迎えてくれる光景を思い浮かべることができた。

高橋光(比較文化学科3年) || 文・写真  
江利そらむ(社会学科3年) || 写真



# ジェンギズ窯 を訪ねて

小道の隅に付けられた小さな看板。良く見ると、手書きで「ジェンギズ窯」と控えめに書いてあります。あるときは看板の横に「セール」と貼ってあることも。なんだか面白そうです。看板が指し示す先は、車一台がようやく通れる細い道。人里離れた場所で暮らす、ジェンギズさんの工房を思いきって訪ねてみました。

狩野慶（ゆずりはら少年自然の里）=文・写真



**軽** 快な声が聞こえてくる日本語のラジ  
オから、トルコの「ネイ」という笛

の音色に変わります。抑揚が効いていて、ゆ  
ったりとした、そしてどこか涼しげな音色で  
す。「日本でいう尺八のようなもの」と説明  
してくれるのは、ジェンギズ・ディクドウム  
シュさん（45）。トルコの首都アンカラで生  
まれ育ち、今はここ上野原市桐原<sup>ゆずりはら</sup>に建てた  
工房で陶芸家として暮らしています。

ジェンギズさんのつくる湯呑みやお皿は、  
はつきりとした水色を表に出したものが多く  
印象です。

「トルコでは空色をつかうことが多い文化で  
すから」

と話すジェンギズさんは、日本で好まれる色  
と、トルコで好まれる色をユニークな視点で  
こう説明します。

「日本の色は、抑えの効いた、でもよく見る  
と飽きない色で、もやのかかった森のなかに  
合うような色。トルコでは色がはつきりしな  
いとケチったかと思われる。向こうは太陽が  
まぶしいので。花はカーネーションとかバラ  
とか、作物だと東のほうはスイカ、地中海の  
ほうはオレンジ、内陸ではリンゴなど、はっ



工房に並ぶ器。はっきりとした空色や草（ちぐさ）色のものがある

きりとした色が多いんです」

小道に付けられた手作りの小さな看板を頼りにしなければ、なかなか辿り着けそうもない場所にあるジェンギズさんの工房。隣に立てられた自宅は、大きな屋根が斜めにつけられた洋風の家。どのような経緯で今のよう暮らしをするに至ったのか興味を湧いてきます。

美術科と陶芸科の二つの大学を卒業するまではトルコで暮らして

いたというジェンギズさん。その学生時代に、一人の日本人のかたとの出会いが日本へ向かうことになったきっかけです。「今では70代」というその日本人のかたが住んでいたマンションには少し困ったことがありました。当時、そこには水がとおっていないなかったようなので

す。そのことを知ったジェンギズさんがバケツにくんだ水をしばしば運んで届けたことがきっかけで、しだいに親しくなっていきました。陶芸に興味があったというその日本人のかたから、益子焼<sup>ましこ</sup>で有名な栃木県益子町のことを紹介されます。

「言葉が分からなくても、目の前のことしか見てなかったですから。ああ行きたいですね」と言つて、日本へ行くことにしました」

当時25歳。それから7年間、益子町で研修生として暮らすことになりました。そのあいだに結婚もします。

そこから桐原で暮らすようになったのは、偶然テレビで取りあげられていたのがきっかけだそうです。そろそろ独立しようと思つていた頃で、桐原の素朴さと静かさに魅かれたといいます。移り住んだ当初は地域のかたから家を借りて暮らしていました。

もともとは二年くらいでトルコへ帰るつもりが、今年で日本に移り住んで20年目を迎えます。

「必死になんでも吸収しようとしてきましたから、なんだかこれからなにが起きてても不思議じゃない、というのがあります」

どこか俯瞰した語りにかくまじきを感じます。いっぽうで、もつと自分の作品が受け入れてもらえるようになるにはどうすればいいか、20年後くらいに自分は何をしているのだろうか、と悩みや不安は尽きないようです。それでも「悩めるかぎり、まあいいんじゃない」とあくまで前向きです。



ジェンギズさんは、人との出会いを時に大きな軸としながら流れるように生きてきたのだな、という印象がありました。でも少し見かたを変えると、積極的に生きかたを選び取ってきた、とも思えてきたのです。「悩めるかぎり、まあいいんじゃない」という語りに少し勇気をもたらつたと同時に、生まれも育ちも大きく違うジェンギズさんがこうしてダイナミックに生きる姿を見て、僕自身、今までの出会いが今の自分にどのような影響を与えているのか、捉え直してみたくなりました。それは、これからのさまざまなお出合いをさらに丁寧に見つめることができるきっかけになるようにも思うのです。



## 都留という 居場所

かがわかずえ  
賀川一枝さん

甘えん坊の次女  
エヴァ

ちょっと人見知りな長女  
ローラ  
LAURA



ダンディな父  
ジョン  
JOHN

賀川さんが飼っている3匹の犬(賀川一枝さん=写真提供)

賀川さんを知ったきっかけは、友人に「ぜひ取材してほしい人がいる」と紹介してもらったことだった。11年前に東京から都留へ移住してきた賀川さん。なぜ都留で暮らそうと思ったのか、今の暮らしはどのようなかお話をうかがった。

今村遥香(社会学科2年) || 文・写真

## 橋のない川を渡る

1月17日午前8時、肌を刺すような寒さのなか、おかしま食品館で賀川一枝さん(54)を待っていた。しばらくすると、大きなワゴン車を運転する賀川さんがいらっしやっつて、窓越しにこやかに会釈をしてくださった。私が車へ乗り込むと、賀川さんは「寒かったですよね」と暖房の風量を強めてから、朝日曾雌にあるご自宅へ車を走らせた。

都留第二トンネルを大月方面へ抜けて、都留バイパスを途中で左へ曲がり、わき道を進むこと20分。デコボコ道の山のなかを進んでいると、目の前に川が現れた。水量は少なく、流れも穏やかだ。賀川さんのご自宅へ向かうにはこの川を車で渡らなければならない。天気予報を確認して、増水しそうなときは前日に車を川の向こうへ渡らせておいて、ご自身は別ルートを歩いて町へ出るという。

車が川を通過している写真を撮りたいと言っていると、「じゃあ、いったんまわってきますので待っていてください」と、車で川を渡り、

Uターンしてきて写真が撮りやすいようにしてください。今度はご自宅へ向かうべく私も車に乗って川を渡る。賀川さんは慣れたようすでゆっくりと車を進めるけれど、私は初めての体験だったので、緊張と不安で、こぶしをかたく握って前のめりになってしまった。

## 賀川さんのご自宅へ

「橋のない川」から少し山道を進むと、大きなログハウスが見えてくる。ここが賀川さんのご自宅だ。山のなかにひっそりとたたずんでいて、まわりに民家はほかに一軒しかない



い。車から降りると、家のすぐ横を流れる小川のせせらぎが聞こえる。まわりの木々や地面の植物を見ると、まだ霜が残っていた。うちの扉を開くと賀川さんの3匹の愛犬たちが元気よく迎え入れてくれた。私がちゃっかり朝食をごちそうになっていると、来たときに吠えていた3匹は、きちんと床にお座りをしていて、撫でると「もつと撫でて」というように私の膝の上に手を置いて甘えてきた。

## 都留へ来たわけ

賀川さんは、都留に移住してくる前、東京都世田谷区にあるご主人のデザイン事務所でコピーライターや雑誌編集のお仕事をされていた。都留のログハウスは、19年前からご主人と2人で週末に通ってつくり、8年前に大工さんが入って完成した。おとしにご主人を亡くしてからは、このおうちで賀川さんのお父さんと犬3匹と暮らしている。

賀川さんが生活の拠点を都留へ移したのは、11年前の2005年。都留へ引っ越してきたのは飼犬のためだったと話す。当時住



上：ログハウス専門誌の編集の仕事をしていた友人にアドバイスをもらいながら建てた。まだガラスがはめられていないときは、家のなかでキャンプのようにして夜を明かすこともあったそう

右：薪ストーブが室内を暖める。家のまわりにはストーブ用の薪がたくさん置かれていた



んでいたところは道がコンクリートで舗装されていて、犬を散歩させるには地面がかたくてかわいそうだと思っていた。そこで、週末や休みのときに飼い犬と遊びにこられるところとして、自然があり犬を放し飼いすることもできる今の場所に家を建てた。「犬たちは、いつもつながれていると自由になりたいと思うだろうけど、いつも自由だからたまにリードをつけるとすぐくうれしいみたい。つながれているうみみたいな感じ」と床にお座りをしている飼い犬を見ながらおっしゃる賀川さん。そのときのまなざしは、我が子を見ているように、やわらかく、やさしいものだった。

### 気持ちの変化

こっちへ来た当初のことを「いい場所があったなという感じで、よそからきてこの自然や環境をただ利用させてもらうっていう意識しかなかったんですよ」と振り返る。

その意識が変わったのは、3年前に山梨県で国民文化祭が開催されたときのこと。水の

ことで全国へ取材に行っていた賀川さんに、都留市役所から都留の水のことを調べて欲しいと依頼があった。調査をするなかで、十日市場地区の湧水や水掛け菜、各地で絶滅しているバイカモなど豊富な地域資源があることを知ったのがきっかけだったという。それからは、都留を知らない人にも知ってもらいたい、私も何か地域に貢献する当事者になりたいと思うようになったという。

### ここで暮らし続けたい

賀川さんは、東京で暮らしているときに、食べ物もエネルギーを手に入れるのも、すべてお金で解決しなければならぬと感じていた。それは便利なものかもしれないけれど、都留へ来て「そうじゃない世界」があることに気づいたそう。たとえば、東京で家を留守にするときに、ペットはお金を払って専門の人や場所に残さなければならぬが、都留では少しのあいだ預かってくれる人がいる。「木を切ったから薪を持ってきたよ」と声をかけてくれる人がいる。そういったさりげない心



しっぽをピンと立て、山へ出かけていくローラ

遣いや、自分が地域に受け入れられているという喜びや安心を都留では感じられるという。それらは東京に約40年暮らしているなかでは得られなかったものだ。なにかお互いにお金の利益がなくても人とつながっているのが都留のよさだと話してくださった。

「私は引越してきたとき以上に、ここで暮らし続けたいってすごい思っただけ。それはこの自然だけではなくて、都留の人たちと

関わることで、ここに住んでいたいと思っただけですね。都留はなんでもある都会と比べて、生活するのに不便だと感じることも多いかもしれない。けれど、すべてでお金で解決できない環境だからこそ、人と人が助け合っていくこうとするのだと思う。今回、賀川さんにお話を聞いて、都留の暮らしのなかには思いやりの気持ちで結びついた関係があると気がついた。



# 猫や歌丸

「猫や歌丸」は2018年4月1日にオープンした。お店に引き寄せられるようにして扉を開けた私は、店主である石川弘子さん（58）に出会った。

## 自分の欲しいものが仕事に

「猫や歌丸」では手作りの和雑貨やアクセサリが販売されている。石川さんはおもに樹脂を固めて作るディップアートと、着物のはぎれを使った吊るし雛の制作販売をしている。お店ではそのほかにも、一貫張り（※）を作る古谷里美さん、店主の義理の妹さんによるフェルト作品が並ぶ。

石川さんは着物が好きだ。お店をはじめめる前から着物に合うアクセサリや、着物をリメイクした服を作ってきた。ディップアートをはじめめるきっかけとなったのも、当時欲しかった桜のかんざしがディップアートでできていたからだだった。有

名なかたの作るものでもとても高価だったそう。ならば自分で、と見よう見まねで作った。その後も作り続け、友人にあげることもあったという。石川さんは自分のために作っていたものが、人に喜んでもらえることを知り、2年前からインターネット販売をはじめた。それから約40、50のディップアート作品を作ってきた。インターネット販売を続けていて、「これは仕事になる」という思いが湧いてきたそう。

## 目を引く扉

現在お店を構えている場所は4年前まで「武川米専門店」という米屋で、おもに山梨県産のお米を取り扱っていた。石川さんは家業として





入り口横のスペース。赤く塗られた壁とタイルが目を引く

お店に立っていた。しかし、旦那さんが亡くなったことでお店を閉めたという。それからというもの、お店の玄関部分は常にシャッターが下りている状態だった。当時、石川さんはインターネット販売で得た自信から、お店をもちたいと思いはじめていた。そんなとき、閉店してから目を背けていたお店の存在に気づく。シャッターが閉まっていると玄関部分が暗く「防犯のためにも、明かりをつけたい」という気持ちもあった。

石川さんは2017年3月に再びシャッターを開けた。光を浴びずにいた壁は傷んでいた。重い工具を担いで傷んだ壁をはぎ、セメントを塗った。そのうちにタイルを張ってみようという気になる。作業を進めるほど、新しいアイデアが次々と湧いてきたという。お店の入り口部分となる玄関扉は、格子をイメージしてサッシにペイントをした。店内の明かりがほのかに透けて目を引く。店内は9畳ほどの広さがある。小さ



上/店主が最初にしたディップアートとなる桜のかんざし。ケースのなかに大切にしまっている  
下/ディップアートのパーツ作り



店主の石川弘子さん

※日本の伝統芸能の一つ。竹や木のかご、ざるに和紙を重ね、さらに柿渋(渋柿の青い果実から搾った液)を塗って作られる。入れ物として使われる



米屋をやっていたときから時を告げる振り子時計

なオレンジ色のライトに照らされた店内に一步入ると、昔にタイムスリップしたような心地になる。大きな唐傘。1時間ごとに時を告げる振り子時計。天井から吊るされた吊るし雛。それぞれが昭和レトロな空間を演出している。床に張られた市松模様のタイルや、電球を覆うために囲んだ和紙、備えつけの棚まですべて石川さんの手で作られたものだ。設計図はあったのですかと尋ねると、「自分のなかにある構想(レ

トロな感じにしたい)だけをたよりに手を動かした」とおっしゃる。

### もの作りがすき

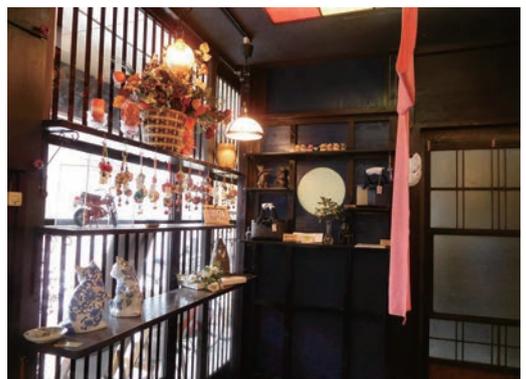
お店を開店してから、大変だったことについてうかがうと、「お店を作る期間ずっと楽しかった。作りたい店を作っちゃった」とおっしゃる。作らなければという急ぎや焦りではなくて、作りたいものを作り続けていたらできていたという感じがいい。重い工具を担いで壁をはがすこ

とも、細かな針金に樹脂を塗って色を付ける繊細な作業も、石川さんにとっては大して変わらない。イメージ通りにでき上がればうれしいし、できなければ悔しい。形になったときの達成感や自信が、次のもの作りへとつながっていく。石川さんの一つひとつのアイデアが、「猫や歌丸」を形作る。お店作りが一段落して満足感に浸っている石川さん。しばらくはマイペースにお店を営んでいきたいと語る。

お店を作ったことによって、興味をもつて人が訪ねてくるようになった。会話をしたりお茶を飲んだりしているとき、「お店を作つてよかった」と感じるそう。現在も改造したい箇所やお店の使い道に対して、構想がふつふつと湧いているそうだ。自分が欲しいと思えるものを作る。石川さんの一貫したものの作りの姿勢に私は引き寄せられたのだ。

江利そらむ(社会学科3年) || 文・写真

ディスプレイのようす。猫の置物がいたるところに置かれている



## 猫や歌丸

〒 402-0053  
山梨県都留市上谷 4-1-6  
TEL 090-3535-4710

# 変化を楽しむ

自ら変化を選んだ人たちのすがたを見ていくと、変わらないものの存在に気がつきました。

ならやの伝統。羽野さんの考えかた。魚政ご夫婦の関係。店や仕事、住む場所、方法が変わっていくなかでも、守り続けたものがありました。たとえ大きな変化を迎えても、それらは変わっていないように思えます。

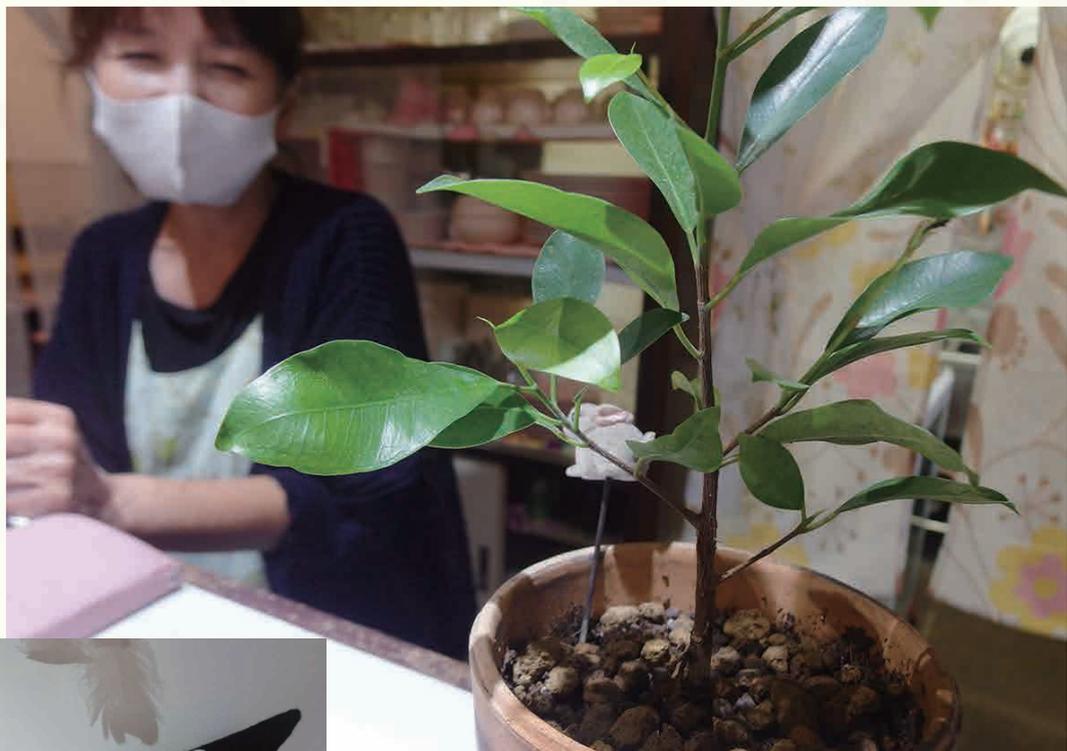
大切なものを見失わず、新しい方法や環境について前向きに考える。

そうすることで、変化する環境に楽しみを見つけられるのだと教えてもらいました。



# 都留の今を写す

新しい生活様式での暮らしがはじめて半年以上経ちます。私たちの毎日が徐々に変化していくなかで、まちのなかでもさまざまな変化を見つけられるようになりました。今だからこそ「都留の今」を記録したい。そう思って私たちはカメラを手にまちを歩きました。



©アルバム (2020年10月12日)

◀:「大人になりきれないからこんな風に飾り付けしちゃう。お客さんからもらったかぼちゃにアイシングで顔を描きました」と店主のゆかりさんはカウンターの隅に置かれた小玉のかぼちゃに目をやった。(風間悠花)

▲:「これガジュマルの木だね、お水をあげていたら小さな根っこがでてきたの」とわが子を見守るような目で木を見つめていた。お店で植物を育てるといふ新しいことに没頭するゆかりさんのすがたが新鮮だった。(風間悠花)



@MARRY'S (2020年11月11日)

「社会の状況やお客様のニーズに応えるのはこれまでと同じ」と話されていた。感染症対策を特別なことに捉えずに、できることから取り組まれているのが印象的だった。(赤松優香)



@川藤 (2020年8月26日)

お店に行くと、以前はなかった消毒液が置いてあった。他にも、席数を減らすために、机に向かい合わせで4枚置かれていた座布団が、2枚ずつ重ねられ対角線上に置かれていた。小さなことから少しずつ対策されているようだ。

(赤松優香)

9月の下旬、「ほっとまんぶくプロジェクト」という学生向けの食糧支援が行われた。学生や地域のかたが集まってお米やカップ麺などを配る。会場には多くの人が集まり、「ありがとう」の声があふれていた。

(渡邊唯)



@楽山自治会 (2020年9月24日)

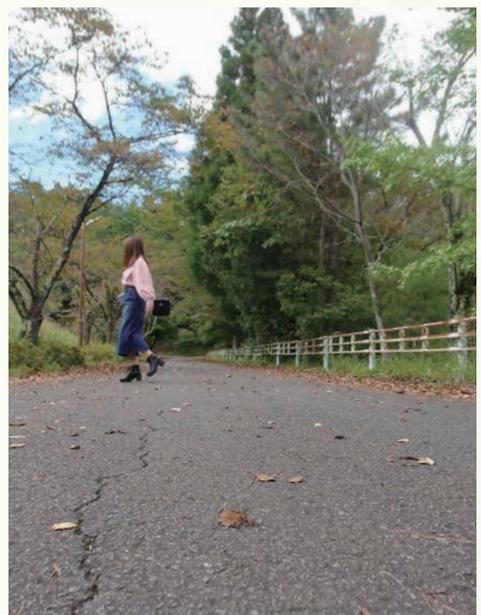


@本学テニスコート(2020年10月12日)

久しぶりに大学周辺を訪れてみると、まちはすっかり秋の景色に移り変わっていた。秋空のもとテニスをする学生や、紅葉した木々を眺めながらひと息つく方がたを見ると、オンライン授業で家にこもりっきりになっていた私の心も癒された。感染症で世界の状況は変わりつつも、大学のまわりには変わらない人びとの動きや秋めいた植物のすがたが見られ、ほっこりした気持ちになった。(深沢有佳)



@本学テニスコート(2020年10月12日)



@うぐいすホール周辺(2020年10月12日)



@本学1号館(2020年9月29日)

◀: 夏休みのあと、教室の黒板の前や人が集まる場所にはパーテーションがつけられた。後期からは対面授業が少しずつ増えている。やっとキャンパスにかよえることが楽し became になった。

(高橋杏佳)

▼: オーケストラの練習風景。パーテーションを、人と人のあいだに立てている。大学のサークル活動にも制限がかけられている。工夫しておこなう練習はいつもとは違った雰囲気があった。

(高橋杏佳)



@うぐいすホール(2020年8月28日)

～離れていても思いを込めて～

佐藤ゆかりさん



コラム

電話で知る

## あの人の今

人と人が直接会わずとも繋がることのできる便利な方法の1つ、電話。声のトーンや話のペースから、文面や顔を合わせてのやり取りとはまた違う新鮮な時間が味わえます。今回は、いぜん取材をしたあの人の今を電話でうかがいます。

風間悠花(地域社会学科3年)=文・写真  
渡邊唯(地域社会学科2年)=文・写真

本誌102号(※)では、吸い込まれるような笑顔を見せてくれるアルバムの店主、佐藤ゆかりさんと、そこを愛するお客さんのよすを記事にした。桂町かづまちにある喫茶店「アルバム」は、去年の9月にリニューアルオープンを遂げる。オープン直後からまだ一度しかお店に行けていなかった私は電話越しに聞こえる、ゆかりさんの元氣そうな声に安心した。

なお店であるためにも、いつまでも夢見続けられるような自分でいたいですね」と嬉しそうに語るゆかりさんに勇気づけられた。

「暗くならないようにワクワクしながらお店をやっているよ」。ゆかりさんは最近、そう自分に言いながらお店を続けているそう。「お店に来れなくなった人にも愛を届けたい」と思っています。私はアルバムが大好きです」とはつきり口にするゆかりさんから、どんな状況でもお客さんを思いやり、お店を大切にしていきたいという強い意志を感じた。

### アルバムの味をおうちで

ゆかりさんはお店での飲食に加え、テイクアウトメニューを増やした。「おうちでピクニック」「ランチボックス」と書かれたメニューにはピスタやピラフ、シフォンケーキなどゆかりさんお手製の料理が詰まっています。一時はほとんどのお客さんからテイクアウトメニューを頼まれることもあったそう。お客さんやゆかりさんの声が響かないアルバムは想像できない。私と同じようにゆかりさんが作り上げる空間を恋しく思う常連さんもきつといるだろう。

### 前を向く

「でもね、今は徐々にお店にお客さんが戻ってきてつありますよ。アルバムを好きになってくれる人たちが私の宝物です。ここが素敵

「今の状況にうまく付き合っていくしかないのよね。この騒動が終わるころには、玉手箱を開けたあとの浦島太郎みたいになつてもかも」と笑うゆかりさんの声にあのクシャと目尻を下げる優しい表情が想像できた。ゆかりさんは相変わらず面白いことをいとも簡単に口に作る。「人の声ってこんなにもあたたかいものだったのか」。ゆかりさんの料理を食べたわけでもお店を直接訪れたわけでもないが、久しぶりにゆかりさんの魔法にかかれた瞬間だった。

～今できる楽しみを～

## 広瀬えみさん



本誌103号(※)で取材したつまみ細工作家の広瀬えみさんの「今」をうかがった。

広瀬さんは都留市<sup>かせい</sup>禾生の喫茶店にて、月に4回ほどつまみ細工教室を開いている。取材したさいの、生徒のかたがたが生きいきと趣味に打ち込んでいたすがたをよく覚えていた。地域の憩いの場だったつまみ細工教室は今どうなっているのだろうか。

### 一緒にする喜び

広瀬さんに今年に入ってから教室のようすについてお話をうかがった。感染症の流行が始まった今年の1月はこれまでどおり教室

を開いていたが、生徒さんからの心配の声や緊急事態宣言の発令により休業することを決断したそう。

広瀬さんはそんななかでも立ち止まらず、再開の日を目指して消毒液の設置や密集を避けるための席の配置の工夫など、対策を講じてきた。その努力の甲斐あって、今では再び教室を開催できている。

「みんなで集まって何かするのが当たり前ではなくなった今だからこそ、こうして集まると生徒さんはとても嬉しそう。それを見て、私も嬉しいです」。人と顔を合わせる機会が減ってしまった今だからこそ、この空間を守りたい。電話越しにそんな決意を感じられた。当たり前が変わった今、一緒に何かに取り組む仲間の大切さにあらためて気づかされる。

### 新しい楽しみ

広瀬さんの家でのすごしかたについてもうかがった。小学生のお子さんがいらっしやる広瀬さん。休校により生活がかなり変わったとおっしゃる。「宿題がたくさん出たから、それを手伝ったり、気分転換にお散歩に行っ

たり。ふだんこんなに子どもと一緒にいることもないので、いつもとは違う時間を過ごせました」。家族との時間を多く取れる今は、今だけの楽しみがあると前向きに教えてくださった。

たしかに私も自粛期間は、いつもより長く家族との時間を過ごせたような気がする。今までと違う生活のなかには新たな発見や楽しみが隠れているのかもしれない。自粛期間のあいだ、ただ家にいるのではなく、つまみ細工や家族との時間によって毎日を充実させているようすにこちらまで元気をもらった。



# みつける 都留の水

都留のまちで水を見つけた。水道や水たまりではない。耳を澄ますときこえてくる、川や滝の音。視線を動かしてみえてくる、水辺の生きもののすがた。私たちの目には新鮮にうつった。水によせて都留での気づきをお届けします。





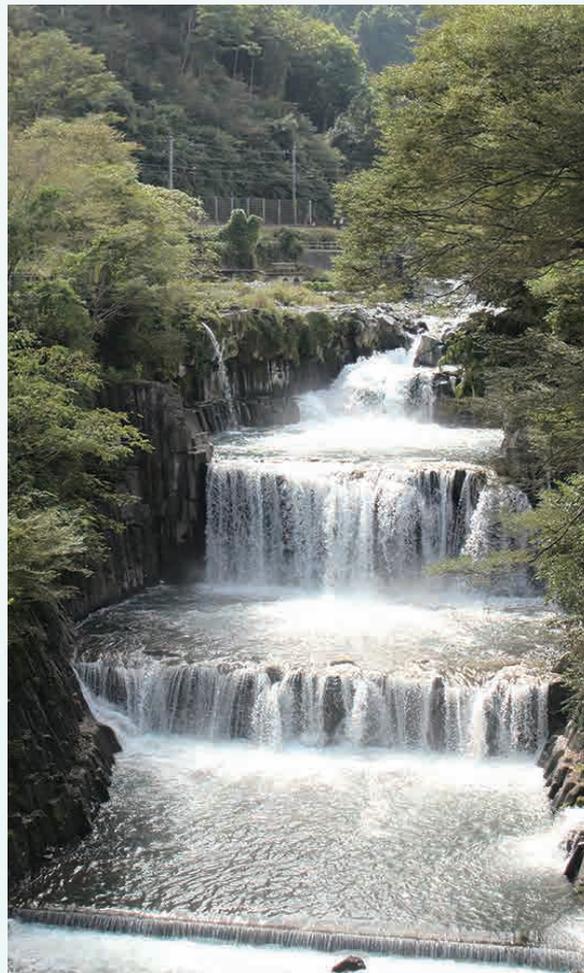
## 詠みたくなる滝

「わっ、川底が見える」。

水の透明度におどろき思わずつぶやく。夏休みの終わりに差ししかかっていた9月のある日、私は田原の滝を訪れた。携帯の地図を片手に線路をわたり、車通りの多い道をゆく。道中の看板はこの先にあると示していた。こんな場所にあるのだろうか。疑いながら神社の左にある小道をすすむ。するとそこには飲み込まれてしまいそうなほど迫力満点な滝があった。目をとじると、流れる音だけが聞こえる。ここから離れるのが惜しいほどだった。

田原の滝との出会いを言葉にして残しなくなった。なにかいい方法はないかと、あたりを見わたすと石碑を見つけた。そこには松尾芭蕉がかつて田原の滝を訪れ、「勢ひあり水消えては瀧津魚」という俳句を詠んだと記されていた。この句は田原の滝の水柱が消え、富士の雪解けにより水増した桂川で、踊っているような魚を見て、春を喜ぶ心情を詠んだものである。芭蕉さんが田原の滝を訪れたのは、冬から春へと季節が移りかわる時期だったことがわかった。

俳句ならば出会ったときの気持ちを言葉にできるのではないだろうか。しかし、俳句



力強いが包み込む優しさを感じる田原の滝(2020年9月18日)

なんて授業で少しふれただけで、知識がたりない。私が芭蕉さんだったなら……とありもしない妄想が頭のなかをよぎる。うまくいくか少し悩んだが、私なりの一句を詠んでみた。

「滝の音と涼風すずかぜふきて心地よく」

この句は、印象的だった滝の音について詠んだ。季語で涼風を使って、夏の終わりを表現した。はじめてにしては、上手に詠めているのではないだろうか。芭蕉さんには及ばないが、お気に入りの一句ができ、うっかり自画自賛してしまった。17文字で心情と風景

を表現するのは、私にはまだ難しかった。これからも俳句を詠んでみよう。続けていくことで、限られた文字に気持ちをのせられるようになるはずだ。

感じた思いを言葉にすると、心のなかが整理され、風景と気持ちが一緒に記憶として残る。田原の滝を訪れた日が、何気ない日常の一つではなく、思い出になった。そして、夏休みで緩んでいた気持ちが、また新たなスタートだと引き締まった。

阿部くるみ(地域社会学科1年) Ⅱ文・写真

# 太郎と次郎に

## 会いに行く

テレビ画面にはみずみずしい緑の植物や白く細い2本の滝が映しだされていた。その滝の名前は太郎・次郎滝というようだ。「こんなにきれいな所があるんだ」というおどろきと、滝なのに太郎・次郎と名づけられているのが意外で忘れられなかった。インターネットで調べれば名前の由来はすぐにでてるだろう。しかし、私はあえてそうしなかった。調べることで、現地にいかなくても満足してしまう気がしたのだ。きれいな景色をこの目でみて、彼らの名前の由来を知るために太郎・次郎滝に行くことにした。

太郎・次郎滝にむかった8月下旬は猛暑日だった。日陰のない道を40分ほどあるく。息は上がり、目的地の手前まで来るころには服に汗がにじんでいた。太郎・次郎滝は谷のようにくぼんだところにあるらしい。そのため、急なくだり坂が続いていた。自分の足をみながらでないと転げおちそうになる。一歩一歩下っていくとだんだん気温が下がり、

ベタベタしていた汗もすつと引いていく。坂を下りきると、猛暑日とは思えないほど涼しい空気に包まれた。あたりをみわたすと太郎・次郎滝以外にもたくさん滝をみつけることができる。さわれるほど近くにある滝や、レーズカーテンのように横に連なっている滝もある。これらの滝のおかげで涼しくなっているのだろう。人工物がほとんどないこともあってか、私はいつもと違う世界に来てしまったかのようにドキドキした。

滝の前には掲示板がある。そこには、太郎・次郎滝の名前の由来が書かれていた。名前の由来は定かではないようだが、掲示板には「太郎と次郎という兄弟の賊が民家へ盗みに入った。しかし、村人につかり追いかけられてしまう。二人は北の崖から飛び降りたが、どちらも死んでしまった。太郎が落ちたほうの滝を太郎滝、次郎が落ちたほうの滝を次郎滝とした」という昔話がかかれていた。見せしめのために名づけたのか二人の最期に同情して名づけたのかはわからない。それでも名前の由来を知り、滝をみながら二人のことに想いをよせるのは歌枕を巡る楽しさがある。

後日、インターネットで太郎・次郎滝に

ついて調べてみた。すると、名前の由来を紹介している記事がでてきた。やはり現地までいなくても由来を知ることができたようだ。だけど滝の大きさや、その場の雰囲気はいつてみないとわからないものであった。滝のようすは、昔話の時代と変わってしまったのだろうか。昔話の登場人物と同じ光景をみるることができるのは、本当にいつてみた人の特権だろう。これからも、自分の目でみて、確認するという事を大切にしたい。

佐藤優美（国文学科1年）≪文・写真



まわりを不思議な雰囲気させる滝(2020年8月29日)



## 泥中の蓮華

夏、東桂ひがしきぐらにある耕雲院こううんいんというお寺に続く石段をのぼりきると、大きな蓮が目に見え飛び込んできた。ひとつずつ鉢にいれられた30株以上もの蓮だ。その茎は私の背丈を優に超えうっそうとしている。なんでも古代蓮という種類らしい。お寺のはからいで蓮のお手入れを手伝わせていただけることになり、大きなはさみで枯れた茎を切っていく。お寺がお盆にお客さんを迎えるためのおもてなしだ。蓮の入った鉢の水は藻に覆われていた。茎をかきわけると、鉢のなかに足が出たばかりのおたまじやくしを見つける。すつきりした蓮の葉は青空によく映えた。

のちに、古代蓮について話をうかがう機会があった。そのころ蓮はタネをつけはじめ、そのようすが巢から顔をだす蜂の子のようでぞつとする。古代蓮は昔の地層から発掘された種類だ。それほど長いあいだ眠っていたられるくらいにタネの皮は厚く硬い。芽を出させるためには人が傷をつける必要があるほどだ。花は昼に閉じ、また咲くと色がうすくなって3日で散ってしまうという。「口

マンでしょ」と語る副住職さんをよそに、私は余計な妄想をしてしまう。「古代」から蓮想した走り回る恐竜たちのわきに、さつきの蜂の子が群生しているというものだ。来年の3月、ソメイヨシノが咲くころをめどにまた株分けからはじめるそうだ。そもそも仏教と蓮の関わりは深い。泥は煩惱を、蓮の花は悟りをあらわす。多くの仏像が座っている座布団も蓮で、蓮華座と呼ばれている。詳しく調べると、もとは品種名のつかない蓮のことを古代蓮と呼んでいたそうだ。しかし昭和時代にあつた建設中のゴミ焼却場で地中に眠っていた蓮が自然発芽するというニュースからその呼び名が一般化したそうだ。とくに有名なものは「大賀蓮」。彼らは恐竜ではなく縄文時代の人々を見守ってきたらしい。

お寺からの帰り道、「真水で蓮の花は咲かないんだよ」という副住職さんの言葉が妙に心に残っていた。次にソメイヨシノが咲くころ、世界は変わっているだろうか。私は変わっているだろうか。澄んだ空、鈴虫の羽音。こんなにあたりまえの自然のなかに人を殺すウイルスがふくまれているなんてウソみたいだ。世間では先行き不安のため心ない言葉も



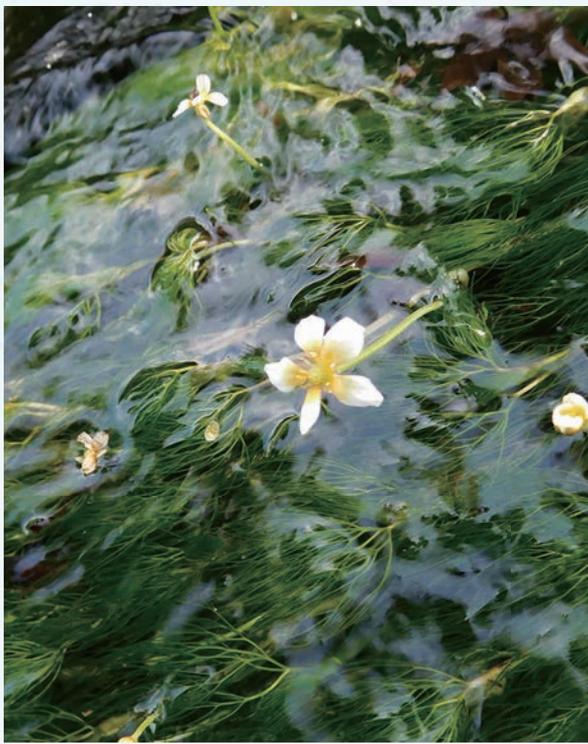
上：徐々に茎を曲げていくが、もたげたようすは特に苦々しい(2020年9月29日)左：花の色が日々薄くなるようすを、仏教ではこの世の儚さにたとえるという(2020年8月16日)

飛び交った。それもきつと過去のことになる。私だつて留学にいけなくなつたという傷から、自分らしく栄養を蓄えているはずだ。たんなる蓮の説明に勇気づけられるとは。わたしにだつて「予定どおり」がなくなつたからこそ咲く、自分らしきがあるのだ。

丸谷美寧(国際教育学科2年) || 文・写真

# 水の時間

8月の最終日、暑さがピークを迎えるお昼過ぎごろ、梅花藻を見るために家をでた。梅花藻について知っていることは、清流にしか咲かず貴重な花だということ、夏狩にある長慶寺で見られることだけだ。さらに、長慶寺までの道はまだ歩いたことがない。未知のことだらけだが、探検のようであわくわくした。お寺が見えてくると、その前の水路に小さ



梅花藻が群生しているのはめずらしい(2020年8月30日)

な白い花が咲いているのを見つけた。これがきつと梅花藻だ。そう思って見てみると、花の中心は黄色く、まわりを白い花びらがとり囲んでいる。長い茎を持っていて、茎どうしがからまりながら作っている緑色が広がっている。立ち上がってみると、その緑色のなかにちよこんと咲いているすがたが見え、かわいらしい。最初はその小ささに驚いたが、弱々しいわけではない。水のなかに咲く花は流れに身をゆだねつつも、飲まれている印象はなく、凜としていた。

長慶寺の川は、足を少し開くだけでまたぐことができるくらい細かった。水は透明で、底がはつきりと見えた。水の上を進むアメンボや泳いでいる魚もよく見える。川の近くでは、水が湧いていた。その中に手を入れてみると、とても冷たい。夏の暑さに我慢できず、水を手ですくって飲んでみる。冷たい水がのどを通る感覚を味わい、暑い暑いと思っていたのもいつのまにか忘れていた。

お寺には、この水について説明する看板があった。富士山にふった雨や雪が地下水となり、長い時間を経てこの地で湧き出ていると書いてある。話しかけてきてくださった長慶

寺の住職さんによれば、湧き出るまでに15年以上かかっているらしい。この水は昔から生活用水や飲み水として使われてきたが、今でも変わらず、地元の人が汲みに来るとも教えてくださった。また、昔は梅花藻など決して珍しい花ではなかったという。新しい家が立ち並び、自然のままの川ではなくなってしまうところ、花が生育できる場所が少なくなってしまうそうだが、住職さんをはじめ、地元のみなさんで環境を守るために活動していると話してくださった。

この日までは、きれいな、たくさん水路が暮らしの近くに流れているな、としか思っていなかった。しかし、梅花藻の話を知り、水と一緒に流れてきた時間が見えたような気がした。富士山から雪どけ水が流れてくるまでにかかっている時間。梅花藻が咲き続けてきた時間も長い。水道から簡単に水が飲めるようになった今でも、昔と変わらず湧き水を飲んでいる人がいる。変わる環境を守るために活動してきた人もたくさんいたのだろう。この日から都留の水に含まれている時間の流れを思い浮かべるようになった。

高橋杏佳(地域社会学科1年) 文・写真



準備は万端だった。かぼんのなかにはカメラと望遠レンズに双眼鏡。それからペットボトルの麦茶。水辺にすむ鳥を探すために私は自転車で家を飛びだした。

久しぶりの秋晴れが肌を焼く。日焼け止めを塗り忘れたことを思いだしてハッとした。日差しをしのぐと太陽から顔をそむけると、ガードレールの下に隠れていた鳥と目が合った。口がぼかんと空いた。彼よりも私のほうがよっぽど驚いていた。

## ハクセキレイをさがしに

自転車を邪魔にならない場所へとめて、わたたとカメラをとりだす。ふりかえると黒い尾つぼがガードレールからのぞいていた。ほつとするような気持ちで一步を踏みだすと、彼は逃げるように用水路へと飛びこんだ。さつきはとなりを自転車で通ったつて動かなかったのに。

「狙われている」ということをすぐに理解したのだろう。鳥にかぎらず生きものたちのこういった方には感服するばかりだ。

用水路をのぞきこむと、ごろごろと転がった石のうえにたたずむすがたがみえた。けれど私がカメラを構えると、彼は岩場から飛び立ってしまふ。やつとの思いでシャッターをきったものの、写真はみごとに白飛びしてしまっていた。

帽子をかぶつたみたいな黒色の頭、白い羽毛の顔とお腹、背中が灰色、頭の帽子とおそろいの黒い尾つぼは長くてツンツンしている。記憶をたどりながらあの鳥の名前を探していくと、私が出会った彼はハクセキレイという名前の鳥のようだった。

それから私はハクセキレイに会いにいつもの用水路へとよく向かうようになった。彼は

いつも「また来たのか」というように私を見ては飛び立っていつてしまふばかり。カメラの容量は一か月前からほとんど変わらないまままだ。

都留の秋は地元よりもずっと短かった。あわてて衣替えを終えたころ、ハクセキレイのすがたはぱったりとみえなくなった。なんども私に追いまわされ、いいかげんに嫌気がさしてしまつたのだろうか。あどけない彼の顔を思いだして心が痛んだ。日差しを反射してキラキラと輝く水面をみていると、ハクセキレイがここを気にいつていた理由がよくわかる。彼はまた私と会ってくれるだろうか。そう願いながら私はからつぼの用水路にシャッターをきつた。

高木帆月(比較文化学科1年) 文・写真



本学周辺の用水路。ハクセキレイがよくおとずれていた(2020年10月21日)



## 音に感じる

水が近い。これが都留にきて抱いた印象だ。家のすぐ隣を水路が流れている。そのため部屋のなかにも水の音がよく聞こえてくる。

私の地元で水路といえ、田んぼ脇の干乾びかけたものを思い出す。都留ではまるで小川のように水が流れていることに驚かされた。室内にも届くさらさらとした流水音には思わず癒される。かすかな水の音が流れる部屋に、これからの生活が楽しみにになった。



都留を歩いて見つけた水路。お気に入りのひとつ(2020年10月17日)

数日後、新居の準備を手伝って来ていた家族が帰り、部屋にひとりきりになった。その夜ふとんに入ったときには、癒しであるはずのさらさらした音がやけにざあざあと大きく聞こえた。夜だからかもしれない。

それとも、ひとりの実感がようやくわいてきたからだろうか。都留で暮らして半年以上が経った今、つねに聞こえていた水音は耳を澄まさなければ聞こえないほど小さい。いつのまに聞こえなくなったのかと少し驚くとともに、ここでの生活に慣れたのだと納得がいった。

水はひと続きの水路を流れているが、幅の広さや水量によって違った音を聞かせてくれる。気分でも聞かえかたが変わる音には飽きることがない。

日々ことなる音が流れる都留の水路。どのように聞こえてくるのか、今日を楽しみに都留を歩く。

林舞子(学校教育学科1年)  
|| 文・写真

## 「太郎・次郎滝」の音

夏の暑さが続く9月8日、友人が涼みに行こうと私を誘った。目的地は「太郎・次郎滝」。本学から歩いて40分ほどの夏狩(なつかり)の住宅地にあるという。まだ見ぬ滝をあれこれ想像しながら、私は夏狩に足を踏み入れた。

しんとした住宅地を抜けた先は窪地になっていた。深呼吸をすると、いぐさに似たに冷たい風が肺いっぱいに入りこんだ。ここまでの歩き疲れが吹き飛んだ心地で窪地の奥へ進む。次第に周囲のセミの声に混じる滝の音も大きくなっていった。はやく正面で見たい。駆け寄りそうになる気持ちを抑え、空に葉を広げた大木を過ぎると、川の向こうに二つの滝はあらわれた。どちらが太郎か次郎か分からないが、右手の太く短い滝と左手の細く長い滝は勢いよく崖を落ちていく。日差しが窪地に当たってその反射がまぶしい。窪地という地形のためか、向こう岸に



木に隠れた「太郎・次郎滝」の裾が見える。もうすぐご対面だ(2020年9月9日)

あるはずの滝の音がすぐそばで聞こえるような気がして、気づくと私は無心で耳を澄ましていた。

寝る前に滝の音が頭のなかで流れることがある。滝を見に行つた日は実家に帰省できず、慣れない一人暮らしが続いていたときだった。そんなとき、その音の力強さが弱つていた私を励まし、清々しさがさみしさを拭ってくれた。いつも変わらずそばにある二つの滝の音は、都留で暮らしていく私の心の拠り所となっている。

青松笑子(比較文化学科1年)  
|| 文・写真

8~10月

# フィールド暦

キャンパス周辺は静かな夏を迎えました。それでも生きものは夏、秋の訪れを教えてくださいました。8月から10月にかけてキャンパスとその周辺で記録した生きものを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



## ツリフネソウ

林の縁の湿った場所でよく見かけます。花が、舟を吊り下げたような形をしていることからこの名前が付いたと言われています。

撮影日:2020年9月2日  
撮影場所:キャンパス周辺



## カブトムシ

『フィールド・ノート』編集部がある4号館前のビオトープに今年もカブトムシが飛んできました。落葉樹の二次林をこのむようです。

撮影日:2020年8月7日  
撮影場所:キャンパス



## ヒグラシ

キャンパスでは7月からヒグラシの「カナカナ」という鳴き声が聞こえるようになりました。背中の緑の模様が印象的です。

撮影日:2020年9月12日  
撮影場所:キャンパス



## オオムラサキ

幼虫はエノキの葉を食べて育ちます。キャンパスにはエノキの大木があり、今年も成虫が観察できました。国蝶に指定されています。

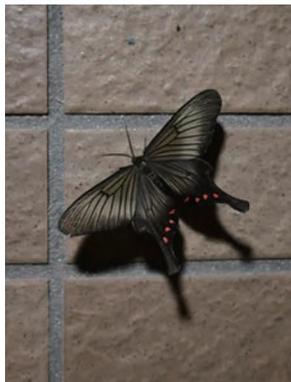
撮影日:2020年8月8日  
撮影場所:キャンパス



## ハンミョウ

都留では秋ごろまで姿を見られます。人が近づくと飛んで逃げ、という行動を繰り返すことから「ミチシルベ」という別名もあります。

撮影日:2020年9月27日  
撮影場所:キャンパス周辺



## アゲハモドキ

はね翅を開くと50mmほどです。チョウウに見えますが、じつはガの仲間です。体内に毒をもつジャコウアゲハの雌に擬態しているといわれています。

撮影日:2020年8月10日  
撮影場所:キャンパス



## アオゲラ

ムササビの子育てが終わりました(43頁参照)。ムササビがいない巣箱に夜になるとアオゲラがやって来るようになりました。

撮影日:2020年10月16日  
撮影場所:キャンパス



## アカボシゴマダラ

数年前から都留市内で見かけるようになりました。翅の縁にある赤い斑紋が特徴です。「特定外来種」に指定されています。

撮影日:2020年8月19日  
撮影場所:キャンパス



## 花から伸びる糸はめしべ？

9月8日、同じ場所にムラサキツメクサを見に行ったところ、前に写真を撮った群生地は日光がよく当たっていたせいか、ほとんどがもう枯れていた。そこで木陰のほうへ歩いてみると、まだ蕾のものが残っていた。緑の蕾がついた花はないが、かわりに花卉の根元あたりから赤い糸のようなものがいくつも伸びている花を見つけた。咲く前の段階だろうか。どのような構造になっているのかバラバ



花卉が赤い糸のようなものが長く伸びている (2020年9月9日)

らに分解してつきとめなくなつたが、かわいいような気がしてぐつと我慢した。「分解なくとも蕾から枯れるまで毎日観察したら、だいたい構造はわかるはず」。

翌日、同じ花を見に行くと、紫色の花弁がはつきりとのぞきはじめていた。カメラで撮つた写真を拡大して見ると、花弁一つひとつの根元から糸が伸びている。糸が全ての花弁にあるということは、ムラサキツメクサはタンポポのような小さな花の集まりで糸はめしべなのだろうか。

9月12日、用意したルーペで花を拡大して見ると、花弁の内側に生えていると思つていた糸は外側に生えているらしいことがわかつた。さらに花卉が全て開ききつた花にも糸は残っていることがわかつた。今までは緑の蕾の段階でのみ糸があるものと思つていたが、大きく開いた花卉で糸が隠れていただけのようだ。全ての花卉にあるということは、やはり糸はめしべで決まりだろうか。さらによく見ていると枝分かれた茎の付け根に、妙な形の葉が茎を覆うようについている。くつきりとした赤茶色の葉脈が見える。「なんだろう」。謎は深まるいっぽうだ。



葉の付け根に、赤茶色の葉脈が浮いて見える (2020年9月12日)

## 草刈り

9月14日、いつもの場所にいくと、ムラサキツメクサは草刈りされてしまつていた。地面にはいくつも花が散らばっている。観察を続けていた花がどこに落ちていたのか、もうわからない。花が咲いていた場所は畑が近かつたためしかたがない。「これから咲くところだったのになあ」。残念な気持ちでいっぱいだったが、分解用の花が手に入ったと前向きに考えて、刈られてしまった花を回収することにした。そして新しく観察するための花を探していると、まだ蕾の状態のものを見つけることができた。刈られてしまった花は糸が赤色だったが、新しく見つけたほうは緑色だ。思い出してみると、これまでにも緑色の糸はあつた。糸がだんだん赤に染まつてい



刈られた花。花弁のそれぞれに糸がある(2020年9月11日)

き、花が開いていくのかもしれない。糸をよ  
く見ていると、長い糸の付け根に隠れてしま  
うくらい小さな、蕾から開いたばかりの花弁  
に気がついた。全体がうす緑がかつた白色を  
している。糸の内側で花弁が大きくなるにつ  
れて紫色になつていき、花開くようだ。

## 分解

散歩から帰ってさつそく分解の準備をす  
る。ピンセットと拡大写真を撮れるカメラ、  
撮影用の黒い背景を用意し、回収した花のな  
かから汚れの少ないものを吟味して選ぶ。

準備を終え、ピンセットで花弁を一つひと  
つ抜いていく。小さめの花だったのが75枚も花

弁がある。分解するうちに、それぞれの花弁  
は小さな花で、気になつていた糸はがくの一  
部であることがわかった。ムラサキツメクサ  
のがくは、糸が何本もくつついたように、す  
るとくトゲトゲとしている。そのなかでもと  
くに長くとがつている箇所が一つあり、それ  
が糸に見えていたようだ。だから蕾や花弁が  
小さいときは長いがくが目立つてよく見えて  
いたのだ。さらに一つの花を分解すると、が  
く、花弁5枚、めしべ、おしべ、花弁奥には  
蜜もあることがわかった。間違いなく一つの  
花だ。分解が一段落して、花がなくなつた茎  
を見ていると、茎の付け根にある赤い葉脈が  
見える葉のことを思い出した。気になつてい  
たその葉の正体を確かめるべく、ネギの薄皮  
を剥くようにしてなかをのぞきこむと、小さ  
な葉があつた。生まれたばかりの新芽の葉つ  
ぱだ。こうして大切な葉を守っているのだ。

分解した結果、ムラサキツメクサの花弁に  
見えていた箇所は一つの花で、全体の花は、  
やはりタンポポのような小花(※)の集まり  
であることがわかった。

## 咲くまえの花弁

分解を終えてからも観察を続けていると、  
花弁が閉じている小花に気がついた。どう  
やらムラサキツメクサの開花は、「うす緑色  
の蕾」、「蕾が紫に色づきながら大きくなる」、  
「旗弁(※)が開く」という段階を経ている  
ようだ。花が咲くということは花弁が開くこ  
となのだから、花弁の閉じた小花があるのは  
普通に考えれば当たり前のことだった。けれ



写真左は花弁が開いているが、右は閉じている(2020年9月17日)



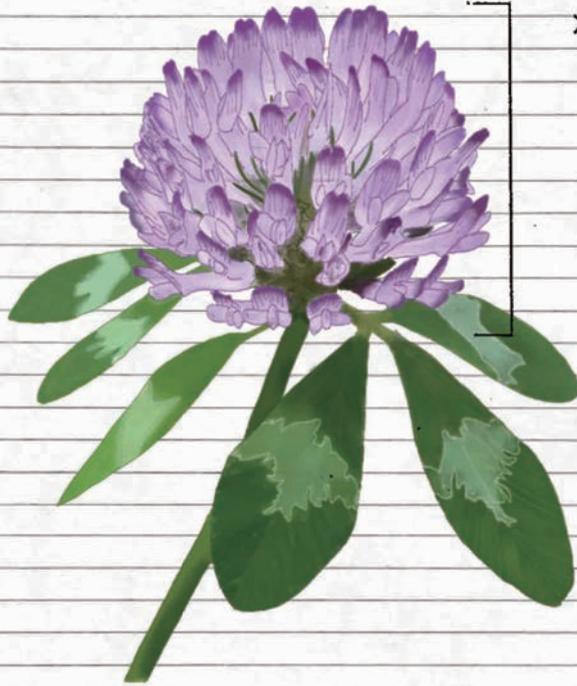
1：分解前  
 2：分解後  
 3：小花  
 4：小花を分解したところ右から、おしべ、めしべ、花弁5枚、がくがあった  
 5：赤い葉脈が見える葉をめくると小さな葉が隠れていた。新しい葉を包むこの部分のことを葉托と言うらしい  
 6：トゲトゲしたかく  
 7：成長前の花  
 (2020年9月14日)



ど気がついたときは感動した。これは、ムラサキツメクサが小花の集まりだと理解したから、花弁の閉じているところに気がつけたのだ。気づきをくり返すと、理解になり、新たな気づきにつながる。

私はインターネットから、ムラサキツメクサの花がだんだん開くという情報を得ていた。けれど最初は全体で一つの花と認識していたから、花弁が一枚ずつ開いていくのだと勘違いしていた。観察をくり返したことで、ムラサキツメクサが小花の集まりであることに気づき、「花がだんだん開く」ということの正しい意味を理解することができた。インターネットの解説にあった「花」は一つひとつの小さな花のことを指していたのだ。

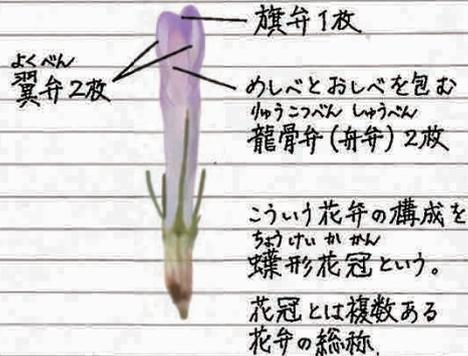
こうして一か月観察を続け、おおよその謎は解決した。しかし、わからないことはまだまだ残っている。がくの色で、赤と緑があるのは成長段階によるものか、種類の差か。紫色の濃さの違いは個体差によるものか。タンポポは綿毛だがムラサキツメクサはどのような種子か。疑問は尽きない。ムラサキツメクサの開花期は長いらしい。これからも観察を続けていきたい。



### \* ムラサキツメクサの全体図

花弁に見える一つひとつが小さな花。(小花)  
この花がつく部分や小花の集団のことを花序という。

### \* ムラサキツメクサの小花



こういう花弁の構成をちぢけいかん 蝶形花冠という。

花冠とは複数ある花弁の総称。

### \* 右から見た小花

← 花の外側  
小花の正面

→ 花の内側  
小花の背面

糸のように見えていたがくの一部。他の部分より2倍くらい長いらしい。

花の外側に小花の正面を向けてそり返るように咲いている。  
小花の正面に、トゲ状のがくのとくに長い部分のあることが多い。

### 「雑草」

道を歩いていると、ムラサキツメクサはそこかしこで生えていることに気がついた。多くのの人にとって雑草という、草刈りをする対象なのだ。けれど理解することで、その植物は「雑草」ではなくなる。今回の観察をとおりして、文字を追って得た知識では本当の理解につながらないという考えにいたった。それは自分で理解したのではない、他人の説明だから詳細がわからなかったり、誤解がうまれたりするためだ。自分で納得するまで観察し、気づきを積み重ねて「理解」する。そうしたらムラサキツメクサは私にとって実体のある、生きた存在になった。

私にとってこれまでこの花は、名もないその他大多数の植物だったから視界に入らなかったが、今はよく目につく。じつと見つめながら綺麗ななと思ったり、開花状況など考えたりしてしまう。自分でつきとめて理解するものは意外と少ない。だから自分でその生を多少なりとも理解したムラサキツメクサは、私にとつてとても特別な花になった。

# ムササビ 観察日記

- 6年目 -

2013年、本学のキャンパスにある森「ムササビの森」に2つの巣箱を取り付けました。今年も7月中旬にムササビの赤ちゃんが誕生し、無事に巣立ちました。ときどき巣箱に戻ってきます。その様子は本学ホームページのムササビライブカメラ (<http://www.tsuru.ac.jp>) でご覧になれます。あたたかく成長を見守ってください。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

8月20日 誕生から1か月



7月中旬に赤ちゃんが誕生しました。約1か月が経過。昼間でもお母さんのミルクを飲み、活発に動きます。

8月28日 お母さんのお出かけ



お母さんは夜になると食事に出かけますが、遠出はしません。頻繁に子どものようなすを後に巣箱に戻ります。

9月4日 似たもの同士



寝るときの姿が母親とそっくりです。ムササビは赤ちゃんが誕生すると仰向けで寝ることが多くなります。

9月4日 どちらが親でしょう？



誕生からおよそ50日。子どもの成長は早く、どちらが親なのか見分けがつきにくくなりました。

9月7日 お留守番



巣箱の出入り口から顔をのぞかせることも増えてきましたが、まだ夜は外には出ず母親の帰りを待ちます。

9月9日 いよいよ外へ



この日、母親が巣箱から外に出たのに続き、巣箱から顔をのぞかせ、はじめて巣箱の外に出ました。



彼岸花が群生していました。差し込む夕日がスポットライトのようです。  
@太郎・次郎滝(2020年9月17日)

## 都留の風景写真集

### —仲秋の候—

風が涼しくなり、夕日が早く沈むようになりました。  
祭りやレジャーのない夏は、なんだかいつもより短く感じます。  
秋のはじまりを探しに、散歩にでかけました。

渡邊唯(地域社会学科2年)=文・写真



秋の空は高く感じます。  
@都留市上谷(2020年10月16日)



水の上まで伸びた梅花藻。力強く咲いています。  
@都留市上谷(2020年9月17日)



看板の隙間からひょっこり。このあと一緒に散歩しました。  
@都留市上谷(2020年10月16日)

## 編集後記



# 家での過ごし方



**お**うち映画をたのしむ。私は、大学生の4年間で100本の映画をみる！と目標を決め、時間を見つけては映画をたのしんでいます。ひとりで映画に没頭する時間は、オンライン授業の疲れをリフレッシュしてくれます。映画のおともにはデザートを用意して、とことん自分を甘やかします。ひとり暮らしをはじめ、時間の使いみちを考えることが増えました。充実した時間を過ごすために、一つひとつの選択を大切にしていきたいと感じる毎日です。  
(阿部くるみ)

**う**ーんと悩んだり、がははと笑ったり、最近オンラインボードゲにはまっています。オンラインボードゲとは、通話しながらおこなうボードゲームのことです。ほとんどのボードゲは2人以上いないと成立しません。密が推奨されない現状ではやりにくいゲームです。しかし、そんな今だからこそボードゲがしたい。なぜならボードゲはまったく知らない人とも仲良くなれるから！「他人と楽しさや悩みを共有することはやっぱり大事だな」とオンラインボードゲをとおして改めて実感しました。(佐藤優美)

**ち**ゃんとした時間に起きるとなあ。そう思いながらも夜ふかしばかりしてしまいます。メリハリをつけるために、ダンスをつかったダイエットを生活に取り入れてみました。なまった体ではすぐへトへトになってしまうのですが、そのぶん、夜にはぐっすり眠ることができます。ダイエットもできて、生活リズムも改善して、一石二鳥！かとおもいきや、運動したあとのアイスがどうしてもやめられず……まだダイエットは成功しそうにありません。(高木帆月)

**じ**ゃんけんをする相手もないひとり暮らし。8人家族で、いつも家に誰かがいる環境で育った私は少し寂しく感じました。それを紛らわすために細かい部分の掃除をしてみることに。あたまを空っぽにすると、歯ブラシでみがくシャカシャカという音がよく聞こえてきます。ふと顔をあげると、スポンジで洗った流しがピカピカになっています。自分がきれいにしたという達成感と、いつもとは違う見えかたに気分も明るくなりました。  
(高橋杏佳)

**か**んじんなことはなんだろう。留学ができなくなってしまったことがきっかけで将来や自分自身についてたくさん考え込むようになりました。行動が制限され、いそがしく動いてばかりいた自分を空っぽに感じていました。そんなとき一番そばにいてくれた自分らしさが「ことば」でした。手書きのメモ、大好きな読書、ここ『フィールド・ノート』での文章表現。人は「すき！」が失われぬ限り、明日をやわらかく受け止められる強さをもてると感じました。(丸谷美寧)

**ん**めな～。これは山形県の方言で、おいしいを意味する言葉です。実家の母が送ってくれた郷土料理を酒の肴に「んめな～」と言いながらビールで喉を潤しています。一緒に酒を酌み交わすのは画面越しの両親で、最近ネットを覚えた父がしきりにビデオ通話をしたがるので晩酌に付き合っています。直接会えば娘を心配する父を鬱陶しくも感じてしまう私ですが、画面越しだと少しは素直になれる気がしました。(伊藤瑠依)

# 次回予告

## 木とともにある記憶(仮)



撮影場所：キャンパスうら山(2020年7月28日)

都留を、観察し、記録する

# FIELD NOTE

no. 106 Dec.

### 発行人

北垣憲仁 (37.43)

### 統括編集者

西教生

### 編集長

宇佐美温加

風間悠花 (2-3.24-27.28-29)

深沢有佳 (6-7.24-27.46-47)

### 副編集長

渡邊唯 (24-27.28-29.44-45)

### 編集

赤松優香

(1.23.24-27.38-42.48)

山本義城 (4-5.43)

青松笑子 (30-36)

阿部くるみ (30-36.46)

佐藤優美 (30-36.46)

高木帆月 (30-36.46)

高橋杏佳 (24-27.30-36.46)

林舞子 (30-36)

丸谷美寧 (30-36.46)

伊藤瑠依 (1-48)

[ ] は編集担当ページ

### ロゴデザイン

工藤真純

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 106号

発行日：2020年12月15日

発行部数：800部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: [field-1@tsuru.ac.jp](mailto:field-1@tsuru.ac.jp)

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

# 落としもの

8月22日、落ちていた松ぼっくりと栗に気がついた。もう夏も終わらしい。秋が深まるにつれて、いろんなものが地面に落ちるはずだ。ほかにはどんな落としものがあるだろう。都留の秋を集めてみよう。



## フィールド・ミュージアム

都留フィールド・ミュージアムとは？ 私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。